佐多稲子全集

第五巻／みどりの並木道

講談社

佐多稲子全集　第五巻

昭和五十三年四月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所／豊国印刷株式会社
製本所／藤沢製本株式会社
定価／二八〇〇円

©佐多稲子　昭和五十三年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　Printed in Japan

0393-152754-2253（0）　（文1）

目
次

みどりの並木道　7
＊
ゆらぐ根太　95
秋風　113
霜どけ　133
雪の降る小樽　147
合唱　162
吹きさらす顔　181
童話　234
静かな町　247
白と紫　270

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

薄曇りの秋の日　289
職人　304
昨日と今日　313
ささやかな設計　334
花のある墓　365
歴訪　378
ズボンを買いに　394
心の棚　404
あとがき・時と人と私のこと　(5)　421
注解　432
初出誌紙・発表年月　434

佐多稲子全集　第五巻

みどりの並木道

一

本郷の東京大学構内の正門の突き当りにある安田講堂の前は、左右にひろがってゆるやかなだらだら坂になっている。その右側の坂をおりてゆくとその先きに、歩道に沿って、通行の人の丈とすれすれぐらいに低い、そして細長い赤煉瓦の建物がある。周りが大きな建物ばかりなので、道端の、低い細長いその建物は如何にも構内の一隅に付属した何かの専用の特別な物置場などのように見えた。また赤煉瓦が古びているので、不断は忘れられてでもいるかのようにひっそりと見え、間をおいて三つ並んだ小さな入口は、おとぎ話の家のようにも見えた。ひとつの入口から覗くと、すぐに階段が下へ向かってついていて内部は地下室だけのそこの壁が道端からも見えた。

今まで構内にさえ殆ど来たことのない親たちには、この特別に何かの専用のように見える小さな地下室へ、自分たちも降りてゆくということですでに、異常なおもいを深めていた。五、六段の階段の下で、すぐ左手に粗末な扉があり、中は四坪ほどの殺風景な部屋であった。奥にもひとつ部屋があるがそれは扉で仕切られている。明り窓が上の道路にむかってついていて、すりガラスを透かして、今にも降り出しそうだった外の光線をその部屋に通していた。まん中に置かれた台を囲んで、そこでは今から奇妙な集まりが持たれるところだった。五、六人の大学生に混じって今日そこに集まっているのは、構内の地図を頼りにこの地下室へ初めて降りて来た親たちと姉妹弟だった。女親が三人、男親が二人、姉妹弟が四人ほどだ。父親もこの部屋で、今日は不安と優しさのまじったひかえめな表情をしていた。地味なスーツの母がひとり、あとの二人の母親は着物をきている。部屋全体のうす暗い、蕪雑さの中で、ひとりの姉らしい若い婦人のお召しの着物の赤っぽいのが、ただひとつの色彩として混じっているだけだった。妹らしい二人の少女のひとりはその

姉と一緒にきている。少女たちは二人とものも言わずに身体を固くして話を聞いている。この部屋では、五、六人の学生のうちのひとりの学生が、外から来たこの親たちと姉妹にむかって、丁寧に説いていた。上の明り窓に背をむけた位置に、台にむかって腰かけたその学生は、話すとき、心持ち顔を斜めに仰向けて、微笑をたたえながら、ゆっくりとした声音で、短かく区切る語尾を、ちょっと押えてはねるような話し方をした。それは如何にも、言葉が常に頭脳の廻転とともにある、というような学生らしい話し方だった。中年の親たちの生活の色にとけた表情を前にして、彼は少し羞じらいながら、熱心に話していた。肉親たちは、帰らなくなってもう一週間になる息子や兄や弟の十六人の学生が、今日一緒に、警察から小菅の刑務所へ送られたというのを聞いて、不安な視線を一斉に彼にそそいでいる。彼は、十六人の学友が、決して悪いことをして警察につかまったのではなく、平和のためにたたかっていて、不当に検挙されたのだ、とそのところから平易な言葉で説いて、十六人を称揚し、再び、わだつみの悲劇を起こさないためには、そして父や母や姉妹の嘆きを再び起こさないためには、平和のたたかいが如何に大切であるかということから、戦争の危機をはらんだ最近の情勢を話した。それらの話を彼は、聞き手たちを尊重しながらもの静かに語ったが、内容は、いわば世なれた大人たちの受け取り方などを押し計ったりしない若ものの清廉さを持っていた。それらの話のあとで、学生は十六人の現在の状態にふれていった。

「そして、十六人は、現在も、全部揃って、立派に、黙否権を行使しておりますので、どうぞ、御家族の方方も、十六人の学友のこの抗議の行為を支持して上げて頂きたいとおもいます。ただこの中で三人だけ、定期券をもっていたために分ったのがひとり、またひとりは、大学の学友たちが、こんな立派な僕らの仲間が不当に検挙された、というので、名前を書いたビラを貼ったことがありまして、そのために分ったとおもわれるのと、あとのひとりはよく分らないのですが、多分、シャツか何かに名前が書いてあったんじゃないかとおもうのですが、その三人だけ名前が警察の方に分っていて、家宅捜索に行ったのがあります」

話が今は直接自分たちにつながってきた、というような応じ方で、「あ、それはうちのでございますよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、長袖の着物をきた痩せぎすのひとりの母親が、青年の語調とは全くちがう、いわば町言葉で話し出した。

「うちの子は、あわてものでございますから、ねどこで脱いで、ひとさまのとまちがえてもいけませんとおもいましてね、私は、みんな、シャツでも、靴下でも、大きく名前を書いておくんでございますよ」

どこででも見られる、子どもの世話と家事で手いっぱいといった地味な母親の、少しせき込んだ言い方に、一座のものが、好意から声を上げて笑った。大学生の息子も、母からは小学生のように扱われているのが、好意の笑いを誘ったのである。

「ああ、あなたが……」

と、今まで中心になっていた学生が、軽くおじぎをする恰好で、その母の息子の姓を言ったが、彼自身も、十六人のそのひとりを実際に知っているかどうかはわからなかった。そして周囲の親や姉妹は勿論、姓名を聞いても分りはしない。

「あのう、とても元気だそうです」

と、学生は母親に息子の消息を伝える。

「お世話さまになりまして。まあ、初めは私、びっくりしてしまいましてね。三日間、床についてしまったんですよ。警察から来ましたときも私はふとんをかぶっていたんですけどね。それでまあ今日は、皆さんのお話をうかがいたいとおもいまして、お父さんについてまいりましたんですよ」

父親のひとりが、妻のあとを引受けて、家宅捜索の模様を、低い声でぽつぽつと話した。小さな工場を経営しているということで、小柄なその父親も、妻と同じように実直な、地味な人柄に見えた。

部屋の隅に造りつけてあるベンチに、スーツをきた婦人と、もうひとりの着物をきた年枝と、二人の母親が掛けていた。スーツをきた母は、となりの年枝だけに話すように、

「うちへ来ましたときも、息子の部屋だけを見てゆきましたけれど」

「ああ、お宅へも行ったんでしたね」

と、聞きつけた学生がこちらへ顔を向けたので、スーツの婦人は、声を少し高くしてあとを話した。

「それからお宅と……」

と、呼びかけられたのは、お召しの着物をきた若い婦人であった。対手は下町風のはきはきした調子で答

えた。
「ええ、もう、うちの弟は、どうせ分っているんでしょう？　警察にだって」
　誰にともなく皮肉な微笑を浮べたその若い婦人は、勝気そうな大きな目に特長のある美しい顔立だった。派手やかな一種の、ゆするような肩つきをして、下から見据えるような強い視線で対手を見た。
「好きなことをしてつかまったんだから、放っとけ、って、父は言うんですけどね」
「いや、彼は、今度もいつものように、みんなの先頭に立っているようです」
　と、顔を斜めに仰向け気味にして、学生は、彼女の弟を称讃した。名前を出してビラの貼られたというのは、彼女の弟で、この学生も彼女の弟のことは、よく知っているのであった。
「そうですかア？」
　と、姉は、弟への称讃を半ば否定して、そして姉らしく笑った。
　今日の中心になっている学生は、学内に組織された救援会の今度の、責任者である、と初めに自己紹介をしていたが、検挙された十六人の学生たちは、すでに弁護を依頼してあり、弁護士はみんな面会をすましている、と言って、その場所に集まった家族たちに、ひとりひとり言伝てを伝えた。さきほどから一言も口をきかず、身体を固くしていた一人の妹には、兄妹二人で下宿している家に対して、兄の検挙のことでもし居づらいことがあるならば、どこかへ変ってもよい、という言伝てがあった。その妹は今年、兄と同じ大学へ入学できて、昨日郷里から上京したばかりだった。彼女はうなずいて聞いていた。
　スーツの母親には、お母さんのことを心配している、という息子からの、逆に刑務所の中からのなぐさめの言伝てだった。母親は、あたりに煙でもただよっているような、不安な感情のあらわれたまなざしで、前かがみに肩をおとして聞いた。
「うちでは、あれと私と二人っきりだもんですから、とても不断から親おもいでございましてね。だけど、刑務所まで連れて行って、どうなりますでしょうか」
　と、彼女はつかまえどころのないような面持で、肩をおとしたままぼそぼそと言った。隣りにいる年枝は、何か言わねばならぬような気がして殊更らに何げなさそうに話しかけた。

「けれどもね、いろんな、悪いことをして心配をかける息子さんもあるんでしょうから、今度は、皆さん、何も悪いことをしたわけではないんですから。本当は、立派なことをなすったんだ、と思っていいんだろうと、おもうんですよ」
「そうでございますね。うちのはほんとに小学校のときから一番で、ずっとその後も成績がよくて、私が、生活のために満州まで働きにまいりましたときも、お母さん、安心して行ってらっしゃいって、そう申しましてね。あれの学費を送るためにも満州まで行ったりいたしましたが、ずい分早くからあれも家庭教師などしまして、お互いに苦労をしてきたもんですから」
引揚者の寮に、母子二人きりの住いだというその母親は、息子が帰らなくなって、誰に話す対手もないこの数日来を、去来する想いで過去の苦労が一層まざまざとなっているように話した。
まわりでは差入れのことが話されていた。二人もそちらに注意を向けた。家族にとっては、刑務所に廻ったということが大きく心にのしかかることにちがいなかった。年枝もまた独房にいる息子のことを考えた。早く本を入れてやらなければ、と、何よりの急務のようにそれを言った。父親のひとりが、
「本は読ませるんですか？」
「ええ」と年枝は心得たふうに答えた。「警察では読ませませんけど、刑務所へ行ってしまえば、もう本の差入れができますから。それに刑務所なら、散歩も短い時間だけど、毎日定まってさせますし、風呂へも入れますしね」
救援の責任者のお株をうばった形で、年枝はしゃべり、ふと気づいて笑った。
「あら、何だか、よく知ってるみたいで、おかしいですけど」
年枝を知っている他の学生が笑い出し、他の家族も怪訝な表情をまじえて笑った。責任者の学生は、それで気づいて、
「ああ、柾川君は、何も言伝てはなかったそうです。ただ、映画のスチールを警察にとられた、ということだけを弁護士さんに伝えたそうです」
「この前、レッド・パージ反対の運動のときでしたかしら、今日はやられるかも知れないから、やられたら、差入れを頼むよって言ったんですよ、お前なんかやられたって、二日で帰されるよ、って笑ったんです

けど、そうだね、と言って照れていたんですけど。小菅までゆくとはおもっていなかったでしょうね」

この家族会で、いわば年枝だけ風変りな母だった。今は別れている夫の差入れで、その経験もあるし、自分も警察に二ヵ月ほどいたことがあり、起訴されて法廷に立ったこともある。この間のことでは心に恥を残すこともなかったけれど、作家としての彼女が戦争中に犯した誤りは、常に胸の底に沈んでいて、いつでも、うずいてくる想いになっていたから、年枝はそれらの自分の経験などは勿論しゃべろうとはおもわず、息子のこともそれ以上はひかえた。

台の向うでは、中途から入ってきた男女の二人の学生が、救援会の、責任者ではない別の学生と何か打合せをしている。それはちょうど十六人の検挙された東大生の中に、ひとりだけ女子学生がいるが、その女子学生の友達であった。女子学生は東京に自宅がないので、友達が差入れの世話をするのであろう。こちらの家族たちはいろいろな話のうちに気持がほぐれてきていた。責任者の学生が今後の差入れについて、十六人の中には地方から来ていて、東京に差入れをするつながりのないものも半分はいるのだから、差入れのときは、十六人に同等に入れて欲しいし、十六人の黙否権を守るためには、家族の姓名も隠して欲しいと述べた。なお、学校の救援会の方でも救援の寄附が集まっているから、食物、洗面具などはすでに差入れているし、今後もそれはつづけられると述べた。そこでは息子や兄弟が、肉親たちの息子や兄弟であるだけでなく、十六人の一人となって、学友たちに囲まれている、という実感が、それらの救援会の活動の話の中にまざまざと感じられた。すでに気持のほぐれてきていた家族たちは、そのことで一層気持がひらけ、取りあえず今日持ってきたシャツや足袋や、現金などをそこへ差出したりした。そのざわざわした中で、息子のシャツや、靴下に名前を入れておいたというさっきの母親も、年枝たちを見て、事件のあとを語るように気負って言う。

「いいえもう、私も寝てはいられませんですわ。もう起きますですよ。まあ今日はね、やっぱり来て皆さんのお話をうかがってようございました。元気が出ましたですよ。ひとりで考えておりますと、ねえ」

「弟は何番ですって？」

と、目の美しい姉は弟の警察での拘留番号を書きつけながら、

「これからみんな、番号なんですね」
まあ、と見据えて笑った表情には、いつとなしに仲間うちの黙契をふくませるようになっていた。年枝が息子の姓と違うのに気づいたスーツの母は、年枝の顔の横からひっそりと、
「私もやっぱり、私だけ実家の名前にかえりましてね。息子は父親の方の名前で、それで、名前がちがうんでございますよ」
そういうことも今は一層、思いの深まるというようにささやいた。
近い機会に弁護士が十六人に面会するとき、家族からの言伝てもできるようにとの責任者の考えで、家族たちは紙片にそれぞれ書きつけた。年枝も、小さい紙片のまっ先に息子の拘留番号を大きく書いた。二十八番へ、と数字をはっきり書く注意は、その数字だけが息子を名指するのだとおもうからであった。今日の報告の中で、十六人の拘留理由開示の公判が、十六日に開かれるということも、話されたが、年枝はその日、あいにくはずせない用事が前から約束してあって、彼女はその公判に傍聴してやれないことを考えた。
二十八番へ、母は、と書き出した。母は十六日、お前も知っているように用事があって公判へゆくことができないが、誰か、多分妹がゆく、と書いた。そしてちょっとしゅんじゅんした。さきほどから胸の中にあることだった。四月五日の夕方検挙された息子は、八日の夕方東京駅へ恋人を出迎えにゆく約束をしていた筈なのを年枝は知っていた。ある女子大学の学生である佳代子は学年末の休暇で帰省していた。息子の行一と佳代子の交際はこの一年半ほど前からのものだったが、それがはっきり愛情としてお互いの間に表明されたのは、佳代子の今度帰省する前日のことであったようだ。自然、彼女の帰省中にはひんぱんな手紙の往復があり、佳代子からの手紙は、いつも学校へ持って通う行一の鞄の中に入っている筈だ。その鞄は今は学友の誰かがあずかっている。そして行一の留守になったのち、すでに佳代子から手紙が二通たまって開封されぬまま、机の抽出しに入れてある。佳代子は約束の日、東京駅で一時間待ち、そして帰ってきた下宿で同宿の友達から聞いて、年枝の家へ飛んできた。今日も家族会の模様を聞くために、佳代子は年枝の帰りを待っている筈だった。
年枝は若い息子の感情を推しはかった。そんな約束

がとぎれたままで宙ぶらりんの気持でいるかもしれない。年枝は、ケイ子さんも、と書き出した。佳代子の頭文字を息子はすぐ読みとるだろう。ケイ子さんも、差入れの世話をしてくれる筈、と書いた。そして、みんな声援している、と結んだ。年枝自身の胸に自分の書いた結びの言葉が沁みた。

その夜、国分寺から奥へ入った林の中の年枝の家では、女ばかり五人、茶の間で行一の差入れの用意をしていた。予ねてこの家は、年枝を中心に、年枝の母と、行一の姉妹との、五人暮らしであった。その夜は行一が抜けて、代りに佳代子が加わり、女ばかりになっている。佳代子は年枝から、行一が小菅へ廻った、と聞くと、まあ、と感嘆詞を入れた。その感嘆詞は、唇に力を入れて発音されたので、まあ、というのが、んまあ、というふうに、上にんがついて聞えた。そして言葉と一緒に顔全体の表情を、真剣にした。色の白い丸顔の、愛らしい鼻と唇を持っている。

三日寝込んでしまった母親の話をすると、年枝の母、といっても継母で、まだ働きもののお篠は、誘われるように、

「そりゃアそうだろう。びっくりしなさったとさ」

と、目のふちをにじませた。行一の姉の千枝は、結婚後男の子を一人産んで胸を悪くして実家で静養している身体であった。彼女はぼうっと赤味のさした頬をして、食事のあとの少しの時間だけ、茶の間に加わって皆の話に合づちを打っていた。妹の道代は六歳のときからつづけて西洋の踊りできたえているので、小柄だが、胸の張った、こりっとした身体つきで、髪を長く肩に垂らしていた。学生の佳代子の清潔な利発さと、道代のもう踊りが専門的になりかけた気負いの、少女っぽさの中にまじった表情とは、何か違ったものがあった。

ちゃぶ台の上にのせた差入れの本は、年枝が行一と自分の本棚とから選んだ。勉強の本の中に、年枝はジャック・ロンドンのホワイト・ファングを入れた。

「一冊々々の本に、行一の番号を書いて貼っておかなきゃねえ」

年枝はそう言い、

「あ、たしかまだある筈よ。茶棚の抽出しに。柾川さんの差入れのときの、名前を書く紙がたくさん残っていたとおもう」

お篠が、薄い紙箱に入ったのを探し出した。それは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com